

## 平成27年度病害虫発生予察注意報第2号

平成28年3月23日  
鳥取県病害虫防除所

### 注意報の概要

県西部平坦地の砂畑ほ場において、春ネギを中心にべと病の発生が増加している。今後の気象条件によっては、急激に発病が増加する恐れがあるため、防除の徹底が必要である。

### 病害虫名：ネギべと病

- 1 対象作物 ネギ
- 2 発生地域 県西部
- 3 発生時期 早い
- 4 発生量 多い
- 5 注意報発令の根拠

- (1) 本年の現地白ネギほ場におけるべと病の発生時期は早く、例年発生がほとんど見られない3月中旬に発生が確認された。
- (2) 県西部における3月18日現在の平均発病株率は8.6%で、4月下旬の平年値(1.4%)と比べても高く、春ネギを中心に発病が増加している(表1)。
- (3) 春ネギの栽培面積の少ない県東部と中部では、3月17、18日の調査において発病は少なかった(表1)。
- (4) 本病は、15~20℃程度で降雨が続くと発病が多くなる。気象予報によると、向こう1か月の天候は数日周期で変わると予想されており、引き続き発病の増加が見込まれる。

### 6 防除上注意すべき事項

- (1) 現在発病が認められるほ場では、直ちにリドミルゴールドMZ水和剤1,000倍液、フォリオゴールド800~1,000倍液、プロポーズ顆粒水和剤1,000倍液、フェスティバルC水和剤1,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液などを散布する。
- (2) 発病が認められていないほ場においては、ランマンフロアブル2,000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ペンコゼブフロアブル600倍液などによる予防防除を徹底する。
- (3) 同一成分及び同系統の成分(FRACコード参照)を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数及び収穫前日数に注意して薬剤を選定する(表2、表3)。

表1 県白ネギほ場におけるべと病の発生状況(3月17、18日調査)

地区	調査ほ場数	発生ほ場数	発生ほ場率(%)	発病株率(%)
境港市	10	7	70.0	12.0
米子市	10	4	40.0	5.2
県西部	20	11	55.0(9.9)	8.6(1.4)
県東部	6	1	16.7	0.7
県中部	10	0	0	0

※( )内の数値はH17年~26年の4月下旬における平年値。春ネギを対象に調査。

表2 ネギべと病の主な防除薬剤（平成28年3月16日現在の農薬登録内容）

薬剤名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	成分	
アリエッティ水和剤	800倍	収穫3日前まで	3回以内	ホセチル	
アミスター20フロアブル	2000倍	収穫3日前まで	4回以内	アゾキシストロビン	
ジマンダイセン水和剤	600倍	収穫14日前まで	3回以内	マンゼブ	
フェスティバルC水和剤	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	ジメトモルフ	銅
フォリオゴールド	800~1000倍	収穫14日前まで	3回以内	メタラキシルM	TPN
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	ベンチアバリカルブ イソプロピル	TPN
ペンコゼブフロアブル	600倍	収穫14日前まで	3回以内	マンゼブ	
ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	4回以内	シアゾファミド	
リドミルゴールドMZ水和剤	1000倍	収穫30日前まで	3回以内	メタラキシルM	マンゼブ
レーバスフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	2回以内	マンジプロパミド	

表3 成分ごとの総使用回数（平成28年3月16日現在の農薬登録内容）

成分名	FRACコード <sup>1)</sup>	ネギでの総使用回数
アゾキシストロビン	11	5回以内（粒剤は1回以内、水和剤は4回以内）
シアゾファミド	21	4回以内
ジメトモルフ	40	3回以内
TPN	M5	4回以内（土壌灌注は1回以内、散布は3回以内）
銅	M1	-
ベンチアバリカルブイソプロピル	40	3回以内
ホセチル	33	3回以内
マンジプロパミド	40	2回以内
マンゼブ	M3	3回以内
メタラキシルM	4	5回以内（種子への処理は1回以内、土壌混和は1回以内、散布は3回以内）

1) FRACコード（殺菌剤コード）

殺菌剤の有効成分を作用点と作用機構から分類した番号や記号のこと。

本コードが異なる薬剤を使用することで、同一系統の薬剤の連用を防ぐことができる。

\*この情報は、鳥取県病害虫防除所ホームページに掲載しています。

(<http://www.jppn.ne.jp/tottori/>)

問い合わせ先 鳥取県園芸試験場 環境研究室 0858-37-4211